

ピンボケ談義「ある落第生と二人の先生」

ある落第生とは小生のことである。二人の先生とは高校時代の日本史担当の林緑先生と、担任で英語担当の鎌倉通敏（みちとし）先生である。もう約50年も前のことだが、記憶は今も鮮明である。

「落第（留年）」

大学2年から3年に進むときの試験を、滅多に出した事のない熱で一科目欠席してしまった。甘く考えていたが、担当教授は、無断欠席者には再試験をやらぬと、つまり落第を宣告された。仕方がないと、その日の内に郷里の長野県飯田市へ帰ってしまった。

それまでの自分は、勉強についてはある程度は出来るんだというプライドがあった。今考えるとそれは学問を芯から好むのでなく、試験勉強のコツが少し上手だっただけなのだ。反応の鈍い自分にも、日がたつにつれ落第という現実が徐々に心にのしかかり、屈辱感が増大してきた。

その頃、飯田駅の改札口を出てくる林緑先生とばったりお会いした。小生のクラスの担任ではなかったが、先生は授業で、受験勉強はそっちのけで、おもしろい逸話をいつも聞かしてくれ、小生は日本史がすっかり好きになった。当時、松本市から飯田市の高校に転勤になっておられた。お名前と違って、熊のような大柄な山男である先生は立ち止まって、私の近況を聞くと、珍しくはっきりとした口調で言われた。「お前、それはいいことなんだ。いずれ医者になった時、患者の気持ちになって物が考えられるようになるには、そういう体験が必要なんだ。」そう言って立ち去って行かれた。しかし自分にはそれが納得出来なかった。

何となく中学校の同級生に会うこともできず、郷里に居られず、仙台に戻った。四月からは1週間に2時間の講義だけの生活が待っていた。始めのうちは英会話をやろうなどと思っていたが、「落第生」というプラカードを掲げて歩いているような気がして、実際には偏頭痛と発作性頻拍症に悩むことになった。

偏頭痛は閃輝暗点と呼ばれる頭痛で、当時はそんなことは分からず、頭痛が始まると3、4時間は何も出来なかった。芥川龍之介が自殺する直前に症状を詳しく記述して「歯車」と題をつけた短編がある。目の中にギラギラ光る歯車の歯のようなものが出て、それがだんだん大きくなり、そして徐々に消えていく。それから必ず強い偏頭痛が始まるのである。

発作性頻拍症は夜に歩いていて急に起こった。立っていることが出来ず、道路にうずくまったところ、通り掛かった人がタクシーで病院に運んでくれ、2

週間ばかり入院することになった。ちょっとしたことがキッカケで頻拍症が起こった。入院中1回、過呼吸症候群の発作—その時はそんな病名は分からなかった—が起こった。医師から「何か心の悩みがあるか」と聞かれたのに対し、「何もありません」と答えた。

退院まぢかになったころ、偶然手にした本の中に鈴木大拙著「東洋のこころ」というのがあった。読んでみると子供の絵本のようにやさしく書かれていて、少し読むでは病院の屋上に上がり、又、読むでは屋上に上がり、下を走る車、歩く人々を眺めた。偏頭痛、発作性頻拍症については逃れようとせず身をまかせ、落第生というプラカードは投げ出せないなら、ちゃんともって歩いていけばいいと、この本が教えているのが分かった。その後、偏頭痛も発作性頻拍症も続いたが、発作の回数は減っていった。

「落第（面接）」

翌年、父が心筋梗塞で急死した。学資を得るため、ある奨学金制度に応募したが、前年度の成績が問題、つまり落第しているからダメと言われた。面接でそうはっきり言われるとむしろ気持ちが良い、勉学にはりが出た。数ヶ月して、当時とびぬけて金額の多かった公衆衛生関係の奨学金制度に応募し、面接試験に長野市に行った。面接担当者は「将来、県の保健所などに勤務していただけますね？」と質問してきた。私はその当然の質問に「一生を公衆衛生の道に進もうと決心して来た訳ではないので、あとでウソをいったことになる」と困る。正直なところ学資が欲しくて応募しました」と答えた。面接担当者はぬけぬけとそう答えた小生に腹を立てたのであろう、「現時点では勤める意思ありとのお答えがなければダメです。」あっさりこれも落第となった。

がっかりして、注意力が低下していたのであろう、長野駅で列車を間違え、高崎線の軽井沢駅まで行ってしまった。長野駅にもどったが、もともとこの手の間違いが得意なのか、次に乗った列車も高崎線急行で、間違いに気づいた時にはドアが閉まり、軽井沢駅までは止まらないのだった。またもどって松本に着いたものの飯田行きの列車はもうなかった。昼頃から深夜まで半日近くいきつもどりつしていたのだ。その時、松本の高校にいたときの担任の鎌倉通敏先生のお宅に足が自然に向かった。小生が高校生の頃、先生は結婚されたばかりで、先生のお宅へは1回だけ文字通りお邪魔したことがあった。ホテルには泊まったことはなく、先生宅へ足が向かったのは、世間知らずの甘えであったと思う。高校卒業後3年、しかも深夜であった。先生はすぐ部屋に通してくれ、奥様はイチゴミルクを出してくれた。朝からろくに食べていなかったのでペロリと食べたと思う。先生は小生の話を手短かに聞くと「早く寝ろや」と泊めて

くれた。

翌朝、襖を少し開けて元気のいい男の子供さんが「お母さん、へんなひとが寝ている」と叫んだ。女の子供さんが「きのう冷蔵庫にとっておいたイチゴがなくなっている」と泣いているのが聞こえた。朝ごはんを一緒にいただいて先生のお宅を出る時、「加藤、お前、列車賃はあるか？」と先生に聞かれた。「それだけあります」と答えてお別れした。

落第と面接失敗は小生にとっていわゆる挫折の時であった。その時、高校時代の二人の先生から受けた言葉と親切は年がたつにつれ、いよいよ大きく強烈に思い出される。単にあの時お世話になったという記憶から、両先生の元へずがる様に足を運んだ自分以外の生徒も多くいたことを思う。また先生の奥様方がこうして転がり込んでくる元生徒にまで温かく振る舞われておられたご苦労へも、長い間気付くことがなかった。15才から20才前後の教え子を見守ってくれた当時の先生は40才台の若さだった。教師とは何の代償を求めない、厳しい仕事だと思う。

林緑先生は飯田高校の校長をされて退職、出身地の飯田市龍江にお住まいになり、公民館長をされ、郷土史を研究され、分厚い「龍江村史」を出版された。最後の年賀状に「さいわいにも無事にすごしておりますが老化はいなめません。国をあげての巨大消費を見るにつけ、いつかは大自然の前にひざまずいて赦しを乞う放蕩息子の姿となる日が脳裏をかすめます。如何なものでしょうか。年頭所感とさせていただきます。」と記されてあった。小生は飯田に帰れば短い時間でも必ず林先生を訪ねることにしていた。先生が大病をされ、これが最後のお別れになると覚悟した折、先生がご自宅の庭に出て、小生を送り出す時、はるか遠くに見える南アルプス連峰を見ながら、「あれが聖岳、あれは千畳岳」と指をさして、昔、先生が登ったことのある山々を教えてくれた。

鎌倉通敏先生は、「鯉のぼりの丘」などの著書を出版されたり、旧制松本高校の校舎の保存運動の先頭にたたれたり、信州出身の俳人、歌人の研究をされた。先生が定年を迎えるに当たり、何かしなければと思い先輩後輩と話し合い、先生が受け持ったすべての生徒から原稿を募集し、「黎明の風―鎌倉通敏先生に贈る応援歌」という本を作って皆で先生に捧げた。先生に会う機会がない教え子たちは、皆、先生から大きく励まされた思い出を書いていた。教師とは厳しい仕事かもしれないが、無数の教え子たちの感謝に包まれている仕事だと思う。

「変な人が寝ている」と叫んだあの時の少年は、現在、NHKのドキュメンタリーの最有力プロデューサーとなって活躍しておられる鎌倉英也氏である。

(2014/8/19)